東胡考

吉本道雅

序言

ユーラシア東部において、中国本土の農耕民とモンゴリアの遊牧民の対立が歴史の一つの原動力であったことは贅言に及ばない。遊牧民に関する最初のまとまった記述が『史記』匈奴列伝であることに明示されるように、匈奴は中国と持続的に交渉した最初の遊牧民であった。勃興以前の匈奴は、東胡・月氏に東西から挟まれていたとされ、東胡は匈奴に先立ち、ユーラシア東部においておそらくは最初の遊牧帝国を樹立していたと思われるが、そうした歴史的重要性にも関わらず、前三世紀末に匈奴の攻撃で壊滅し、中国との持続的交渉の機会を得なかったため、東胡の動向はきわめて断片的にしか伝えられていない。

『史記』匈奴列伝には、まず春秋時代の部分に「燕北有東胡・山戎」とあり、ついで、戦国後期における秦・趙・燕の長城構築の部分に燕将秦開の東胡撃退が見え、ついで秦始皇の事績の部分に「東胡彊而月氏盛」とあり、最後に、冒頓単于の建国の部分に東胡討滅の記述が見える。この匈奴列伝の一連の記述が東胡を通時的に扱った唯一の材料である。さらに、『後漢書』烏桓鮮卑列伝などには、烏桓・鮮卑を東胡の後裔とする記述が見える。

近年、考古学的資料の増加により、鮮卑の墓葬に対する体系的な研究が公刊されるようになり、①さらにその源流としての東胡に対する考古学的展望も試みられるようになっている。②これらの研究にあっては、『史記』匈奴列伝の記述はおおむね無批判に用いられることが一般的である。しかしながら、『史記』の記述は、多くの問題を孕むものであって、決して無批判に依拠しうるものではない。③本稿ではこうした問題意識に立ち、東胡に関わる文献的記述に対する包括的な史料批判を試みるとともに、その作業によって濾過されたより確実な文献的情報と考古学的研究とを整合

することで、東胡について現時点で展望しうることがらを確認するものである。

① 魏堅編二〇〇四・孫危二〇〇七。
② 馬利清二〇〇五：一五四～一六一。
③ 吉本二〇〇六。

第一章　東胡に関する文献

東胡に関わる文献の記述は、上掲の『史記』匈奴列伝をも含めてきわめて乏しいため、文献史学においては、東胡はむしろ烏桓・鮮卑の淵源として言及されることがより一般的であった。包括的な記述としては、白鳥庫吉一九一〇～一三・内田吟風一九四三・馬長寿一九六二・林幹一九八九[①]などがあるが、いずれも文献に対する批判は必ずしも十分ではない。本章では、まず、東胡に関する文献的記述を全面的に検討することにする。

「東胡」の字義については、『史記索隠』匈奴列伝の引く服虔説に「在匈奴東、故曰東胡」とある。「胡」は前漢ではおおむね匈奴を指すが、「胡」を単称したり、あるいは「東胡」や「胡服」の如く、「胡」を用いた語彙は、基本的には漢代に成書した文献にようやく出現する。先秦の成書が推定される文献には「胡貉」が見えるだけである。[②]

こうした一般的な状況に一見矛盾することだが、「東胡」は『山海経』海内西経に、

東胡在大沢東。夷人在**東胡**東。貊国在漢水東北。地近于燕、滅之。孟鳥在貊国東北、其鳥文赤・黄・青、東郷。

と見える。『山海経』は前三世紀の初頭から中葉までに基本的に成立し、前二三九年に成書した『呂氏春秋』にすでに引用されている。『山海経』海外海内経は、その本来の形式は海外海内経図であり、画像の説明が文章化され、それに基づき現行本が作成されたものと思われる。[③]この一節については、東胡・夷人・貉国・孟鳥の四画像が海内図の東北隅に置かれ、図の作者の意図では海内東経図に属したが、文章化の段階で海内北経に数えられ、[④]ついで海内西経に錯簡したものであろう。海外海内経には、そのほか海内東経に「西胡白玉山」が見える。ここで注目したいのは、海内南経に「匈奴」が見え、その郭璞注に「一曰獫狁」とあることである。「匈奴」は基本的には前漢以降に成書した文献にしか見えず、従って、漢・匈奴の交渉によってはじめて知られた称謂であると推定される。[⑤]この事実は、海内南経が本来「獫狁」に作っ

ていたものが、郭璞以前に「匈奴」に改変されたことを示唆する。要するに海外海内経において、それ以外の先秦文献に一般に見えない異族の称謂は、前漢以降の改変の可能性が否定できない。『山海経』の記述は、「東胡」の称謂が戦国以前に存在したことの積極的な根拠にはならないのである。

なお、戦国後期の成書と目されることもある⑥『逸周書』王会や王会に附された伊尹朝献にも

北方台正東、高夷嗛羊、嗛羊者、羊而四角。独鹿邛邛、邛邛善走者也。孤竹距虚。不令支玄獏。不屠何青熊。**東胡**黄羆。山戎戎菽。其西般吾白虎黒文。屠州黒豹。禺氏騊駼。大夏茲白牛、茲白牛、野獣也、牛形而象歯。犬戎文馬、文馬赤鬣縞身、目若黄金、名吉黄之乗。数楚毎牛、毎牛者、牛之小者也。**匈奴**狡犬、狡犬者、巨身、四足果。皆北嚮。（王会）

正北空同・大夏・莎車・姑他・旦略・豹胡・代翟・**匈奴**・楼煩・月氏・孅犁・其龍・**東胡**、請令以橐駝・白玉・野馬・騊駼・駃騠・良弓為献。（伊尹朝献）

と、「東胡」が見えるが、同時に「匈奴」が見えることからこれらはその成書自体が前漢に降るものと思われる。

ついで検討すべきは、『戦国策』趙策二／武霊王平昼間居

今吾国東有河・薄洛之水、与斉・中山同之、而無舟檝之用。自常山以至代・上党、東有燕・**東胡**之境、西有楼煩・秦・韓之辺、而無騎射之備。故寡人且聚舟檝之用、求水居之民、以守河・薄洛之水。変服騎射、以備其参胡・楼煩・秦・韓之辺。

である。『史記』趙世家／武霊王十九年にも引用されており、「胡服騎射」に関わる有名な一節だが、胡服騎射の記述は、実は『商君書』更法を換骨奪胎したものであり、さらに更法には前漢以降にしか見えない表現が頻見する。⑦要するにこの一章は、『史記』以前に「東胡」の称謂が確かに存在したことは証するものの、やはり先秦に遡りうるものではないことを示している。

「東胡」の用例は、あとは『史記』、とりわけ匈奴列伝のそれにほぼ尽きる。以下、個別に検討していこう。まず、

故自隴以西有緜諸・緄戎・翟獂之戎。岐・梁山・涇・漆之北有義渠・大荔・烏氏・朐衍之戎。而晋北有林胡・楼煩之戎。燕北有**東胡**・山戎。

の一節は、秦穆公（前六五九～前六二一）・晋悼公（前五七二～前五五八）の事績の間に置かれてはいるが、ここに掲げられた北族は、年代記的記述においては戦国以降にしか見えないものがほとんどであり、実際には春秋・戦国を通観した記述である。匈奴列伝は決して厳密な編年的構成を採っているわけではないのである。[8] この一節を根拠に春秋期の燕北に東胡があったと主張することはできない。ついで、

秦昭王時、義渠戎王与宣太后乱、有二子。宣太后詐而殺義渠戎王於甘泉、遂起兵伐残義渠。於是秦有隴西・北地・上郡、築長城以拒**胡**。而趙武霊王亦変俗胡服、習騎射、北破林胡・楼煩。築長城、自代並陰山下、至高闕為塞。而置雲中・鴈門・代郡。其後燕有賢将秦開、為質於**胡**、**胡**甚信之。帰而襲破走**東胡**、**東胡**卻千餘里。与荆軻刺秦王秦舞陽者、開之孫也。燕亦築長城、自造陽至襄平。置上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡以拒**胡**。当是之時、冠帯戦国七、而三国辺於**匈奴**。

では、「東胡」のほかに「胡」＝「匈奴」が見える。秦・趙・燕が既存の北族を制圧した上で、長城を構築して辺郡を設置し、胡＝匈奴と対峙したとする記述は、一般には匈奴の出現を説明する際の無意識的な前提となっている。[9] 確かに、前四、三世紀の交あたりに長城構築が開始されたことや、その一つの動機として、後述するように、すでに前五世紀ころから、東アジア＝モンゴロイドに属する既存の北族とは異なった、北アジア＝モンゴロイドに属する遊牧民の南下があったことは事実であろう。しかしながら、それらの事実は、この記述の一般的な信憑性を保証するものでは決してない。そもそも秦・趙・燕三国に対峙する大勢力としての匈奴は、秦始皇の事績のあとに置かれた「東胡彊而月氏盛」という下文の記述にたちまち矛盾する。匈奴が長城地帯全域に対峙する大勢力となったのは、冒頓の北族統一後のことであり、ここの記述は、

諸左方王将居東方、直上谷以往者、東接穢貉・朝鮮。右方王将居西方、直上郡以西、接月氏・氐・羌。而単于之庭直代・雲中。

に見えるような冒頓統一以後の匈奴のありかたが投影されたものといわざるを得ない。

さらに、記述の各部分も、年代記的記述とは少なからず矛盾している。秦については、義渠征服の結果、隴西・北地・上郡が設

置されたように見える。しかしながら、前二七一年の義渠滅亡に対し、前二七九・前二七一年に設置された隴西郡・北地郡は義渠の故地と目されているが、上郡設置は前三〇四年である。[10] 趙につき、「北破林胡・楼煩」とあるが、趙世家の年代記的記述ではむしろ林胡・楼煩との友好が記述されている。[11] 要するに、個々の事件は、北族撃退→長城構築→辺郡設置という因果関係の枠組みに二次的に挿入され、その図式に適合するように改変を被っているといってよい。

とりわけここの燕の記述は戦国期の東胡についての最も具体的な材料として扱われることが一般的であり、すでに前漢後期の『塩鉄論』伐功「燕襲走東胡、辟地千里、度遼東而攻朝鮮」はこの一節を引用しつつ、さらに朝鮮攻撃をも附加している。しかしながら、秦開の説話では、「為質於胡、胡甚信之」の「胡」が、「帰而襲破走東胡、東胡卻千餘里」においてはじめて「東胡」になっているのである。

そもそも秦開の名はここにしか見えない。荊軻とともに刺客列伝に見える秦舞陽の祖父とわざわざ注記してあることから、荊軻に関わる記述を『史記』が編纂する際に、これに関連するものとして獲得された材料と思われる。従って、この記述は前漢に成立したものとなろう。同じく荊軻に関わる刺客列伝「願太子疾遣樊将軍入匈奴以滅口、……太子曰、……置之匈奴、是固丹命卒之時也」に「匈奴」が見えることも、前漢以降の記述であることを支持する。「胡」の燕侵攻は、同じく前漢の成立に係る[12]『戦国策』斉策五／蘇秦説斉閔王章にも、

昔者斉燕戦於桓之曲、燕不勝、十万之衆尽、胡人襲燕楼煩数縣、取其牛馬。夫胡之与斉非素親也、而用兵又非約質而謀燕也。

と見える。同じ事件は『説苑』君道

燕昭王問於郭隗曰、寡人地狹民寡。斉人削取八城、匈奴駆馳楼煩之下。以孤之不肖、得承宗廟、恐危社稷。存之有道乎。郭隗曰、有。然恐王之不能用也。昭王避席、願請聞之。郭隗曰、帝者之臣、……

に見えるが、「胡」を「匈奴」に作ることは、前漢時代の普通の認識を示すものであろう。上述の如く、冒頓の北族統一以後、上谷以東の燕地は匈奴左方に対峙し、匈奴の侵入をしばしば被っていた。秦開説話は本来、前漢初年の状況を反映して、匈奴＝

「胡」を記述したものであろう。匈奴列伝編纂の段階に至って、戦国期、冒頓以前の「東胡彊而月氏盛」という状況が想起され、「胡」が「東胡」に改変されたものであろう。事実の問題として、戦国後期に燕が長城を築いて対峙した遊牧民に、東胡（厳密にいえば漢代に「東胡」と称されることになる勢力。煩雑なので以下注記しない）が含まれていた可能性は否定できない。[13] 匈奴列伝の改変は結果的には全くの錯誤とはいえない。しかしながら、その事実は決して秦開説話それ自体の史実性を保証するものではない。

さらに、この一節の北族撃退→長城構築→辺郡設置という記述のありかたが、実際の因果関係を保証するわけではないことは上述の如くである。秦開の北族撃退と上谷以東の燕北五郡の設置にはそもそも一意的な因果関係を確言しがたい。次章に後述するように、この記述のみを根拠に、東胡を燕北五郡の先住民とし、この地の考古学的文化を東胡のそれと主張することはもとより困難なのである。

匈奴列伝では、この記述のあとに、「其後趙将李牧時、匈奴不敢入趙辺」と、李牧の事績を置く。これは廉頗藺相如列伝

李牧者、趙之北辺良将也。常居代鴈門、備匈奴。以便宜置吏、市租皆輸入莫府、為士卒費。日撃数牛饗士、習射騎、謹烽火、多間諜、厚遇戦士。為約曰、匈奴即入盗、急入收保、有敢捕虜者斬。匈奴毎入、烽火謹、輒入收保、不敢戦。如是数歳、亦不亡失。然匈奴以李牧為怯、雖趙辺兵亦以為吾将怯。趙王譲李牧、李牧如故。趙王怒、召之、使他人代将。歳餘、匈奴毎來、出戦。出戦、数不利、失亡多、辺不得田畜。復請李牧。牧杜門不出、固称疾。趙王乃復彊起使将兵。牧曰、王必用臣、臣如前、乃敢奉令。王許之。李牧至、如故約。匈奴数歳無所得。終以為怯、辺士日得賞賜而不用、皆願一戦。於是乃具選車得千三百乗、選騎得万三千匹、百金之士五万人、彀者十万人、悉勒習戦。大縱畜牧、人民満野。匈奴小入、詳北不勝、以数千人委之。単于聞之、大率衆来入。李牧多為奇陳、張左右翼撃之、大破殺匈奴十餘万騎。**滅襜襤、破東胡、降林胡、**単于奔走。其後十餘歳、匈奴不敢近趙辺城。

を踏まえたものである。「滅襜襤、破東胡、降林胡」の三句が、張釈之馮唐列伝

臣大父言、李牧為趙将居辺、軍市之租皆自用饗士、賞賜決於外、不従中擾也。委任而責成功、故李牧乃得尽其智能、遣選車千三百乗、彀騎万三千、百金之士十万、是以北逐単于、**破**

東胡、滅澮林、西抑彊秦、南支韓・魏。当是之時、趙幾霸。

ないしその原資料から二次的に挿入されたものである[14]ことは、この部分にほぼ対応し、その原資料と目される『戦国策』佚文[15]にこの九字が見えず、またその上下の「大破殺匈奴十餘万騎」「単于奔走」が明らかに連続することから確実である。馮唐の発言なので、これも漢代に降ることになるが、戦国後期の趙の北方に、漢代に匈奴・東胡と称されることになる遊牧民が南下していたことは認められよう。

廉頗藺相如列伝では、この記述のあとに「趙悼襄王元年」（前二四四）の紀年を置くので、李牧の北族撃退を孝成王（前二六五～前二四五）あたりに繋けていることになるが、『史記』趙世家ではさらに遡って、惠文王二十六年（前二七三）に「取東胡歐代地」の一節を繋ける。趙世家の敬侯以降の部分はほぼすべての年次において、「記言」を交えない「記事」をもち、六国年表に比べて内容がはるかに豊富である。加えて、六国年表との紀年や「記事」の矛盾が頻見し、趙世家編纂に当たって、六国年表とは独立した趙年代記が利用されたことがわかる。しかし、この年代記は、『竹書紀年』魏紀九七の魏惠王後元十年（前三二五）の韓挙敗戦を、趙世家が肅侯二十三年（前三二七）に誤って繋けることに証されるように、戦国趙の記録そのものではなく、前漢の編纂物であることが確認される[16]。この記述にしても「東胡」は前漢の改変を被っていると思われる。「歐代地」につき、『史記索隠』は「東胡叛趙、駆略代地人衆以叛、故取之也」と解するが、文法に合わない。これを下掲の「甌脱」に比定する林澐一九九二bの説は魅力的だがなお不確かである。とまれ、東胡について確実な年代のわかる記述ではある。

匈奴列伝はさらに秦始皇の事績のあとに「東胡彊而月氏盛」の一節を置き、冒頓の北族統一のところに、

冒頓既立、是時東胡彊盛、聞冒頓殺父自立、乃使使謂冒頓、欲得頭曼時有千里馬。冒頓問群臣、群臣皆曰、千里馬、匈奴宝馬也。勿与。冒頓曰、奈何与人隣国而愛一馬乎。遂与之千里馬。居頃之、東胡以為冒頓畏之、乃使使謂冒頓、欲得単于一閼氏。冒頓復問左右、左右皆怒曰、東胡無道、乃求閼氏。請擊之。冒頓曰、奈何与人隣国愛一女子乎。遂取所愛閼氏予東胡。東胡王愈益驕、西侵、与匈奴間、中有棄地、莫居、千餘里、各居其辺為甌脱。東胡使使謂冒頓曰、匈奴所与我界甌脱外棄地、匈奴非能至也、吾欲有之。冒頓問群臣、群臣或曰、此棄地、予之亦可、勿予亦可。於是冒頓大怒曰、地者、国之

本也、奈何予之、諸言予之者、皆斬之。冒頓上馬、令国中有後者斬、遂東襲擊東胡。東胡初軽冒頓、不為備。及冒頓以兵至、擊、大破滅東胡王、而虜其民人及畜産。

と、冒頓の東胡討滅を記す。「東襲擊東胡」は、下文の「西擊走月氏、南并楼煩白羊河南王」および「北服渾庾・屈射・丁零・鬲昆・薪犂之国」とともに冒頓の北族統一を東西南北の順に整理した記述の一部である。「渾庾・屈射・丁零・鬲昆・薪犂」が明らかに漢語ではなく、従って匈奴語の音訳であることからも窺われるように、匈奴との交渉の過程で漢にもたらされた伝承に属する。東胡平定の説話においても匈奴語「甌脱」がそのまま保存されている。匈奴列伝の下文には、文帝三年（前一七七）の右賢王の侵攻を記した次に、「其明年」すなわち文帝四年（前一七六）のこととして、

今以小吏之敗約故、罰右賢王、使之西求月氏擊之。以天之福、吏卒良、馬彊力、以夷滅月氏、尽斬殺降下之。定楼蘭・烏孫・呼揭及其旁二十六国、皆以為匈奴。諸引弓之民、并為一家、北州已定。

という冒頓の遺書を載せ、ついで「後頃之、冒頓死」とある。北族統一の完成が実際には冒頭の死の直前にあったことを知る。この事実は、東胡討滅とそれに続く北族統一を方位順に整理した記述が、冒頓の死後にその事績を顕彰すべく匈奴人によってまとめられたものであったことを示唆する。そうした意味で、ここの東胡に関する記述は他とは一線を画し、東胡史研究の起点とすべきものであるといえる。

① そのほか、林幹・再思一九九五がある。
② 吉本二〇〇二b・二〇〇六・二〇〇八。「胡貉」は戦国後期における匈奴の称謂であると思われる。
③ 吉本二〇〇七。
④ 『逸周書』王会およびそれに附載された伊尹朝献は『山海経』などを素材に編纂されたものと思われるが、「東胡」が王会で「北方台正東」、伊尹朝献で「正北」と、北方に置かれているのは『山海経』海内北経に属していたからであろう。
⑤ 吉本二〇〇二b。
⑥ 小川琢治一九二九。
⑦ 吉本二〇〇八。
⑧ 吉本二〇〇六。
⑨ 秦・趙・燕のいわゆる「北長城」については、中国社会科学院考古研究所編二〇〇四：二七一～二七四を見よ。長城の構築開始については『史記』匈奴列伝の記述が用いられている。
⑩ 楊寛一九九七。王輝二〇〇〇は、「王五年、上郡疾造、…」の銘を

もつ戈を秦恵文王後元五年（前三二〇）の製作とする。これに従えば、上郡の設置はさらに遡ることになる。

⑪ 吉本二〇〇六。

⑫ 同章は、「当是時、秦王垂拱受西河之外」が『新書』過秦上「当是時也、商君佐之、内立法度、務耕織、脩守戦之具、外連衡而鬬諸侯、於是秦人拱手而取西河之外」を節略することに明らかなように、賈誼以降の創作に係る。

⑬ 上述の如く、『山海経』海外海内経図が、東北隅の最西端とはいえ、海内東経に「東胡」を含めていたと推測されることも、「東胡」と燕の近さを傍証する。

⑭ 張釈之馮唐列伝の原資料はおそらく、「破東胡、滅澹林」のように作ったものであろう。現行本の「澹林」は「襜襤」をより簡単な漢字で写したもの、「林胡」は、『漢書』張馮汲鄭伝「破東胡、滅澹林」の注に「如淳曰、胡也、匈奴伝曰、晋北有澹林之胡、樓煩之戎也」の「澹林之胡」を略称したものである。廉頗藺相如列伝は、「破東胡、滅襜襤」を挿入したのち、「林胡」が「襜襤」と同じものであることを失念して、「降林胡」を加え、攻撃の強度の順に、「滅襜襤、破東胡、降林胡」と並べ替えたものであろう。吉本二〇〇八参照。

⑮ 『太平御覧』巻二百九十四／兵部二十五／示弱「戦国策曰、趙将李牧、常居代・雁門、備匈奴、以便宜置吏、市租皆輸入於幕府、為士卒費、日擊数牛饗士、習騎射、謹烽火、多間諜、厚遇戦士、為約曰、匈奴即入盗、急入收保、有敢捕虜者斬、匈奴毎入、烽火謹、趣入收保、不敢戦、如是数歳、亦不亡失、然匈奴謂牧為怯、趙王譲牧、牧如故、王怒、使人代将、歳餘、匈奴毎来、出戦、数不利。復遣牧、牧至、如故約。匈奴数来無所得、終以為怯。辺士日得賞賜而不用、皆願一戦、於是乃具選車、得千三百乗、選騎得万三千匹、百金之士五万人、彀弓弩者十万人、悉勒習戦。大縱畜牧、人衆満野、匈奴小入、佯北不勝、以数千人委之、単于聞之、大喜、率衆来入、牧多為奇陣、張左右翼擊、大破之、煞匈奴十餘万騎、単于奔走、十餘歳不敢近辺也」。

⑯ 吉本一九九八。

第二章　東胡をめぐる諸問題

（1）　考古学的諸文化

東胡の考古学的遺存としては、前一〇～前四世紀の遼西にあった十二台営子文化をこれに当てる説がつとに提唱された。すなわち、一九五八年に発見された遼寧朝陽十二台営子墓地につき、朱貴一九六〇はこれを東胡の遺存とした。同じく一九五八年には、内蒙古自治区寧城県南山根で銅器群が発見され①、李逸友一九六四はこれを戦国時代の東胡の遺物とした②。秋山進午一九六八～六九は、今日では夏家店上層文化として十二台営子文化とは区別される南山根などの遺跡を異質として除いた上で、十二台営子など遼寧の遺跡を東胡のものとした。十二台営子文化を東胡に帰する説は、とりわけ日本では今日でもこれを支持する研究者が少なくない③。しかしながら、実のところ、その根拠は、上掲の匈奴列伝の記述に他ならず、その依拠しがたいことは上述の如くである。

なお、中国においては、十二台営子文化を夏家店上層文化の一

類型とみなす見解が継続したため、劉観民・徐光冀一九八一・靳枫毅一九八七など夏家店上層文化を東胡に帰する見解が提示された。[4] 十二台営子文化の夏家店上層文化との異質性は、朱永剛一九八七によって提起され、翟徳芳一九九四・朱永剛一九九七・劉国祥二〇〇〇によって確認された。十二台営子文化を除いた夏家店上層文化の年代は、前一一～前七世紀に当たるが、[5] 上述の如く文献的に東胡の出現が確言できるのは前三世紀に降り、年代的に適合しない。

さらに、近年著しく進展している形質人類学的研究によれば、春秋期以前の中国北疆の考古学的諸文化の担い手が基本的に東アジア＝モンゴロイドに属するのに対し、文献的に東胡の後裔とされる鮮卑さらに契丹は北アジア＝モンゴロイドに属するが、中国北疆における北アジア＝モンゴロイドの最古の事例は、楊郎文化に属する寧夏固原彭堡于家荘墓地、毛慶溝文化に属する内蒙古崞縣窰子墓地であり、[6] 春秋後期～戦国前期すなわち前五～前四世紀に当たるとされる。[7] 北アジア＝モンゴロイドに属する東胡は、前一一・前一〇世紀まで遡る夏家店上層文化・十二台営子文化を決して担い得ないのである。

そもそも、東胡について、文献から獲得される最も確実な情報は、結局のところ、前三世紀末に匈奴の東方にあって強盛を誇ったということである。現時点で確認される匈奴文化の最古の遺跡は、ザバイカル西部のセレンガ川流域に認められる。[8] ここで注目されるのは、モンゴル東部から南部、ザバイカル東部、さらに中国領内の呼倫貝爾高原の広範囲を主要な分布域とし、匈奴文化に先行して繁栄した板石墓文化である。[9] その位置・年代からいって、匈奴列伝の東胡の記述にもっともふさわしい。鮮卑に属することが確言される最古の文化である札賚諾爾文化が呼倫貝爾高原に分布することも、鮮卑を東胡の後裔とする文献の記述にやはり適合的である。[10] 考古学的資料はなお不十分で、その認識も不確定な部分を多く含むが、現時点では、板石墓文化こそが、東胡の遺跡として最も有力な候補であると考える。[11]

(2) 屠何

「東胡」の称謂が文献的に漢代に降ることは確実であり、それは匈奴語から漢訳されたものであろう。漢代の文献から、戦国後期の趙に東胡が侵入したことが推定されるが、それでは、戦国後期の東胡は本来何と称されていたのであろうか。この問題の手掛かりとなるのが、『管子』小匡

於是乎桓公東救徐州、分呉半、存魯蔡陵、割越地、南拠宋鄭、

征伐楚。済汝水、踰方地、望汶山、使貢絲于周室、成周反胙於隆嶽、荆州諸侯、莫不来服。中救晋侯、禽**狄王**、敗**胡貉**、破**屠何**、而騎寇始服。北伐山戎、制冷支、斬孤竹、而九夷始聴、海濱諸侯、莫不来服。西征、攘白狄之地、遂至于西河。方舟設柎、乗桴済河、至于石沈。

の「屠何」に対する尹知章注「屠何、東胡之先也」である。『管子』小匡は、「東」「南」「中」「北」「西」と斉桓公の遠征を順番に述べる中で、「中救晋侯」について、「狄王」「胡貉」「屠何」を「騎寇」として並べている。小匡は『国語』斉語を藍本とするが傍線部は小匡において加筆されており、同じく加筆部分である「西服流沙西虞、而秦戎始従」では、秦を「秦戎」と蔑称している。これは斉湣王（前三〇〇～前二八四）時代の斉秦対立を反映したものと思われ、小匡の成書年代を示す。従って、「中救晋侯」の一節は、前三世紀初頭の趙北の実状を反映するものとなる。「騎寇」という表現とも相まって、とくにそれ以前の文献に見えない「胡貉」「屠何」は南下した遊牧民を指すものとなろう。[12] 同様の状況は、『墨子』にも窺われる。

北為防原泒、注后之邸・嘑池之竇、洒為底柱、鑿為龍門、以利燕・代・**胡貉**与西河之民。（『墨子』兼愛中）

雖北者且不一著何、其所以亡於燕・代・**胡貉**之間者、亦以攻戦也。（『墨子』非攻中）

兼愛中の「泒」「后之邸」「嘑池」「底柱」「龍門」の全ては今日の山西に比定されており、[13] ここに「燕代胡貉」を含む「北」は趙地を指すものにほかならないが、非攻中の「不著何」は、「屠何」と同じものとされる。兼愛中・非攻中は『墨子』十論において古い層に属し、[14]『管子』小匡と同じく前三世紀初頭の作品とみなして差し支えない。さて、この「屠何」は、降って上掲の『逸周書』王会には、

北方台正東、高夷嗛羊、嗛羊者、羊而四角。独鹿邛邛、邛邛善走者也。孤竹距虚。不令支玄獏。不屠何青熊。東胡黄羆。山戎戎菽。

と、「不屠何」が、孤竹・令支・山戎そして他ならぬ東胡と並べられているが、孤竹・令支・山戎は『管子』小匡では「北」に属し、燕北が想定されている。『漢書』地理志には、遼西郡の地名として、令支縣およびそれに属する孤竹城とともに、徒河縣が見

える。「徒河」が「屠何」にあたることはすでに指摘されている。[15]要するに、「屠何」の所在地が、戦国後期初頭から前漢の間に、趙北から燕北に東遷したということである、

遼西郡徒河縣について、『魏書』は、慕容廆伝において慕容廆が「徒何之青山」に遷徙したことを載せるとともに、慕容部・段部など拓跋部以外の鮮卑を「徒何」と称している。尹知章が「屠何」を東胡の前身とするのは、おそらくは東胡の後裔とされる鮮卑の一部が「徒何」と称されたことに基づく類推であって、それ以上の独自の根拠をもっていたとは思えないが、結論的にいって、この類推は偶中している可能性がある。

まず第一には、趙北から燕北への移動である。東胡が趙北にあったことは、上掲の趙世家惠文王二十六年（前二七三）や張釈之馮唐列伝の李牧の事績に見える。とくに、後者では「単于」すなわち匈奴が東胡と並べられている。『管子』『墨子』の「胡貉」「屠何」（「不著何」）が匈奴・東胡の戦国後期初頭における称謂だったのであろう。趙北にあった東胡が漢代に燕北に移動したことは、冒頓の東胡討滅後、その餘類が烏桓山を保って烏桓となったという『後漢書』烏桓鮮卑伝の記述に対応する。後述の如く、烏桓山は清代の阿嚕科爾沁旗に比定され、燕北の遼西郡疆外に正に位置する。徒河縣の名称は、置縣の際になお「徒河」を自称する集団があり、それをこの地に遷徙させたためとも考えられないことはないが、むしろ『逸周書』王会のような認識を前提に、ここを上古の「不屠何」の故地とみなしたためであろう。漢代の縣名にはいずれも類例がある。[16]

第二に指摘すべきは、「屠何」と「東胡」の発音の類似である。同様の議論としては、つとに一八二〇年にAbel-Rémusatが「東胡」をTungusの音訳とする説を立てている。[17]「屠何」が北族の語彙であったことは、同音異訳の多様性や、後漢時代の南匈奴単于「屯屠何」の名が『後漢書』南匈奴列伝などに見えることから了解される。Abel-Rémusatの説明を援用すれば、これを漢訳するに当たって、匈奴＝「胡」との方位関係を明示する便宜を兼ねて「東胡」の文字が選ばれたということになる。「東胡」の訳語は速やかに定着し、戦国期の資料にあった「屠何」の一部は「東胡」に置換された。上掲の『山海経』海内西経・『史記』趙世家／惠文王二十六年・張釈之馮唐列伝などに見える「東胡」はそれに当たる。『逸周書』王会が「不屠何」・東胡を並列するのは、新旧の原資料を調整することなく用いたためであろう。

(3) 東　胡　王

上述の如く、戦国期の東胡を燕に関連づけるのは、もっぱら

『史記』匈奴列伝の記述であり、それを除けば文献的にはむしろ趙との関係を示す材料しか見あたらない。現実の問題として戦国期の燕北五郡に東胡が侵攻した可能性は十分認められるが、むしろ注目すべきは、『漢書』高帝紀四年（前二〇三）「北貉、燕人来致梟騎助漢」に「北貉」として見える「貉」（「貊」）である。「貉」（「貊」）は、戦国中期以降、燕の東北疆外にあった異族の汎称で、他ならぬ十二台営子文化の担い手であったと思われる。[18] それでは、戦国期の燕北五郡への東胡侵攻という『史記』の認識を成り立たしめた契機は何か。

ここで指摘すべきは、前漢前期の燕北における「東胡王」の存在である。すなわち、『史記』韓信盧綰列伝には、燕王盧綰が高祖十二年（前一九五）に匈奴に亡命して東胡盧王に封ぜられ、景帝中六年（前一四四）に盧綰の孫[19]である他之が漢に帰参し、亜谷侯に封ぜられたと見える。盧綰につき、韓信盧綰列伝には、「綰為蛮夷所侵奪、常思復帰、居歳餘、死胡中」と不遇のうちに亡命後歳餘で卒したとあるが、匈奴列伝には、「後燕王盧綰反、率其党数千人降匈奴、往来苦上谷以東」とある。「上谷以東」は、匈奴列伝に見えた燕の辺郡にほかならない。前漢前期の半世紀にわたり、「東胡王」が匈奴左辺の先鋒として燕北五郡を威嚇し続けていたのであり、戦国以前に燕北に東胡があったとする匈奴列伝の認識は、実はこの事実を過去に投影したものではなかったかと思われる、

「東胡王」は、「東胡」そのものと同様に、匈奴語を漢訳したものに相違なく、従って、「東胡王」の存在は、冒頓の滅ぼした「東胡」の遺民が燕北にあったことを証言するものとなる。また、「東胡王」の称号は、その支配下にあった「東胡」がなおその称謂に値する程度に民族集団としての実態を有していたことをも示している。そのことは、『漢書』李広蘇建伝に「丁霊王」衛律が見える一方で、丁零（丁霊）の民族集団が依然健在であったこと[20]に傍証される。この間の「東胡」の状況を伝えるものとして、『新書』匈奴に、「竊聞匈奴当今遂羸、此其示武昧利之時也。而隆義渠東胡諸国、又頗来降」とある。『史記』匈奴列伝には、文帝六年（前一七四）の記述ののち、「後頃之、冒頓死。子稽粥立、号曰老上単于」と冒頓の死を記し、老上への公主の降嫁と中行説の逸話ののち、文帝十四年（前一六六）の匈奴入寇を記す。また、『漢書』文帝紀には、十一年（前一六九）に「匈奴寇狄道」と見える。匈奴の「羸」とは、おそらくは前一七四～前一六九年、冒頓の死後、老上の地位が安定するまでの間、匈奴の外征が鈍化したことを指すものであろう。とまれ、この記述は、「東胡王」の支配下にあった民族集団が、漢への来降を決定する程度の自律性

を有した下位集団を擁していたことを示している。

(4) 烏　桓

『史記集解』韓信盧綰列伝に「如淳曰、為東胡王来降也。漢紀東胡、烏丸也」とある。「漢紀」は荀悦『漢紀』を指すが、この一節は現行本『漢紀』には見えない。そのためか、『漢書注』韓彭英盧吳伝では「如淳曰、為東胡王而来降也。東胡、烏丸也」と、「漢紀」が外されている。

烏丸（烏桓）に関する最古の記述は、『史記』貨殖列伝の、

夫燕亦勃・碣之間一都会也。南通斉・趙、東北辺胡。上谷至遼東、地踔遠、人民希、数被寇、大与趙・代俗相類、而民雕捍少慮、有魚塩棗栗之饒。北隣**烏桓**・夫餘、東綰穢貉・朝鮮・真番之利。

であり、『史記』の一応の成書年代である太初元年（前一〇四）時点の状況として扱いうる。ついで『漢書』では、地理志にこの貨殖列伝を引用した記述を別にすれば、匈奴伝

漢復得匈奴降者、言烏桓嘗発先単于冢、匈奴怨之、方発二万騎擊烏桓。大将軍霍光欲発兵（要）〔邀〕擊之、以問護軍都尉趙充国。充国以為、烏桓間数犯塞、今匈奴擊之、於漢便。又匈奴希寇盗、北辺幸無事。蛮夷自相攻擊、而発兵要之、招寇生事、非計也。光更問中郎将范明友、明友言可擊。於是拝明友為度遼将軍、将二萬騎出遼東。匈奴聞漢兵至、引去。初、光誡明友、兵不空出、即後匈奴、遂擊烏桓。烏桓時新中匈奴兵、明友既後匈奴、因乗烏桓敝、擊之、斬首六千餘級、獲三王首、還、封為平陵侯。

が最も早く、この事件は昭帝紀元鳳三年（前七八）に「冬、遼東烏桓反、以中郎将范明友為度遼将軍、将北辺七郡郡二千騎擊之」と見える。

『史記』『漢書』ではほぼ不明といってよい前二世紀の状況については、『後漢書』烏桓鮮卑列伝に、

烏桓者、本東胡也。漢初、匈奴冒頓滅其国、餘類保烏桓山、因以為号焉。……烏桓自為冒頓所破、衆遂孤弱、常臣伏匈奴、歳輸牛馬羊皮、過時不具、輒沒其妻子。及武帝遣驃騎将軍霍去病擊破匈奴左地、因徙烏桓於上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東五郡塞外、為漢偵察匈奴動静。其大人歳一朝見、於是始

置護烏桓校尉、秩二千石、擁節監領之、使不得与匈奴交通。

と見える。烏桓とともに東胡の後裔とされる鮮卑について、同伝には、

鮮卑者、亦東胡之支也、別依鮮卑山、故因号焉。…漢初、亦為冒頓所破、遠竄遼東塞外、与烏桓相接、未常通中国焉。

とある、烏桓山・鮮卑山の所在地については、阿嚕科爾沁旗・科爾沁右翼中旗に比定する張穆『蒙古遊牧記』[21]の説が『後漢書』の記述に最も適合的である。すなわち科右中旗は遼東郡の北方に位置し、かつ阿嚕科爾沁旗は科右中旗の西南にあって「相接」の位置関係にあるからである。霍去病の匈奴左地撃破は、『漢書』武帝紀元狩四年（前一一九）に「去病与左賢王戦、斬獲首虜七万餘級、封狼居胥山乃還」と見える。烏桓の五郡塞外への移住は『後漢書』に初見し、護烏桓校尉も『漢書』には見えない。しかし、『漢書』昭帝紀「烏桓反」は、それ以前に烏桓が漢の羈縻下にあったことを明示し、匈奴左地撃破を契機に烏桓を遷徙させたとする記述を支持するものといえる。そのことはまた、烏桓山を長城から遠からぬ阿嚕科爾沁旗に比定することの妥当性をも示す。

烏桓を東胡の後裔とすることは、『三国志』烏丸鮮卑東夷伝裴松之注に引く王沈『魏書』「烏丸者、東胡也。漢初、匈奴冒頓滅其国、餘類保烏丸山、因以為号焉」に初見し、『後漢書』烏桓鮮卑列伝はこれをほぼ引用している。それ以前では、『後漢書』孝和孝殤帝紀李賢注に引く闕駰『十三州志』に、班彪の発言が伝えられ、

護烏丸、擁節、秩比二千石、武帝置、以護内附烏丸、既而并於匈奴中郎将。中興初、班彪上言宜復此官、以招附東胡、乃復更置焉。

と、烏桓を「東胡」と称してはいるが、烏桓が冒頓に討滅された東胡の後裔であることを明言するわけではない。これらの記述は、その後代性からいって心許ないものといわざるを得ないが、燕北の地に前一四四年まで「東胡王」があり、その四半世紀後の前一一九年の時点で烏桓の存在が確認できるという事実は、「東胡王」支配下の東胡遺民を烏桓と同定し、烏桓・鮮卑を東胡の後裔とする一連の記述を支持するものといえよう。

烏桓に関するまとまった記述は、王沈『魏書』→『三国志』烏桓鮮卑東夷伝→『後漢書』烏桓鮮卑列伝と時代が降るほど詳細に

なっており、一般的にいえば、後代の記述ほど信用できないということになりかねないわけだが、烏桓に関する限り、『後漢書』の記述はそれ以前の断片的な材料とよく適合しているというべきである。

① 李逸友一九五九。

② 寧城南山根は今日では夏家店上層文化の遺跡とされるが、夏家店上層文化を東胡に帰することは、つとに、赤峰紅山後遺跡の発見に際して濱田耕作らが提唱している（東亜考古学会編一九三八）。

③ 宮本一夫二〇〇〇・町田章二〇〇六。

④ 夏家店上層文化を東胡の遺存とする説は林幹一九八九・加藤謙一一九九八など文献史学に受容された。

⑤ 烏恩岳斯図二〇〇七。

⑥ 林澐一九九二a・二〇〇三。

⑦ 烏恩岳斯図二〇〇七。

⑧ 臼杵勲二〇〇四。

⑨ 板石墓文化については、Цыбиктаров 1998・高浜秀一九九九・馮恩学二〇〇二・烏恩岳斯図二〇〇三・二〇〇七：二一二～二一四・臼杵勲二〇〇四・馬利清二〇〇五：一五四～一六一などを参照。呼倫貝爾高原の板石墓については、米文平一九九七を見よ。

⑩ 札賚諾爾文化など早期鮮卑の考古学的文化については、喬梁・楊晶二〇〇三・孫進己・孫海二〇〇三・臼杵勲二〇〇四・魏堅編二〇〇四・孫危二〇〇七などを参照。

⑪ 二〇〇二～〇三年、内蒙古林西縣井溝子遺址西区において、春秋後期～戦国前期、前五～前四世紀に断代される五八基の墓葬が発掘された。後期に属する比較的保存状態のよい二八基のうち、二五基にはウマ・ウシ・ヒツジ・ロバ・ラバなど家畜の骨格が副葬されていたが、農具や農産物は全く発見されておらず、被葬者の頭骨二〇個は北アジア＝モンゴロイドと鑑定されている。夏家店上層文化終末ののち、この地に南下した遊牧民の遺跡であり、吉林大学辺疆考古研究中心・内蒙古文物考古研究所二〇〇四・朱泓二〇〇六はこれを東胡に比定するが、年代・地望の点で文献的記述に適合しない。

⑫ 狄に関する同時代的記述で最も早く年代付けられるものは、『春秋経』荘三十二（前六六二）「狄伐邢」である。春秋中・後期から戦国後期にかけて内蒙古中南部にあった毛慶溝文化の担い手がこの「狄王」であろう。これに対し、桃紅巴拉文化の後套平原およびオルドスの遺跡はそれぞれ、匈奴列伝「而趙武霊王亦変俗胡服、習騎射、北破林胡・楼煩」の林胡・楼煩に属するものと思われる。詳細は吉本二〇〇六・二〇〇八を参照されたい。

⑬ 孫詒譲『墨子閒詁』巻四／兼愛中第十五「**北為防原泒**、説文自部云「防、隄也、」周礼稲人云「以防止水、」原、亦水名、無考、畢云「泒、疑即雁門泒水也、」詒譲案、説文水部云「泒水、起鴈門葰人戍夫山、東北入海、」即嘑池之原、此挙其原、下又詳其委也、**注后之邸**、畢読「注」属上句、非、此与下「注五湖之処」、文例正同、后之邸、疑即職方氏并州沢薮之昭余祁也、爾雅釈地十薮、燕有昭餘祁、釈文引孫炎本、「祁」作「底」、「祁」「底」「邸」、並音近相通、「昭」作「后」者、疑省「昭」為「召」、又誤作「后」、「之」「余」音亦相転、漢書地理志「太原郡鄔九沢在北、是為昭余祁、并州薮、在今山西太原府祁縣東七里、」**嘑池之竇**、職方氏「并州其川虖池」、鄭注云「虖池出鹵城、」案、漢書地理志亦作「虖池」、礼記礼器作「悪池」、注云「悪当為呼、声之誤也、」「嘑」「呼」字同、戦国策秦韓中山策、並作「呼池」、畢云「即虖沱河、出今山西繁時縣、古無「池」字、即沱異文、故此亦以池為沱也、」顧云「『竇』即『瀆』字、周礼大宗伯注『四竇』、釈文本亦作

『瀆』」**洒為底柱**、洒与下文灑同、当読所宜反、「底」当作「底」、禹貢「東至于底柱」、偽孔伝云「底柱、山名、河水分流、包山而過、山見水中、若柱然、在西虢之界」、洒即謂分流也、畢云「説文云『灑、汎也』、洒假音字、水経云『砥柱山在河東大陽縣東河中』」括地志云『底柱山俗名三門山、硤石縣東北五十里黄河之中』、案、在今山西平陸縣東五十里、三門山東、」**鑿為龍門**、畢云「水経云『龍門山在河東皮氏縣西』」括地志云『龍門山在同州韓城縣北五十里』、山在今河津韓城二縣界、」」

⑭　吉本二〇〇二a。

⑮　孫詒讓『墨子閒詁』巻五／非攻中第十八「**雖北者且不一著何**、道蔵本如此、畢本作「中山諸国」、云「四字旧作『且一不著何』五字、一本如此、史記趙世家云『恵文王三年滅中山、遷其王於膚施』、表作四年、元和郡縣志云『定州、戦国時為中山国、中山之地方五百里、城中有山、故曰中山』今直隷定州是」、蘇云「中山之亡当魏文侯世、墨子与子夏子門人同時、此事猶当及見之、畢引史記趙恵文王三年滅中山、非是」、詒讓案、中山初滅於魏、後滅於趙、詳所染篇、然此「中山諸国」四字、乃後人臆改、実当作「且不著何」四字、旧本作「且一」、道蔵本作「且不一」、並衍「一」字、「且」疑「祖」之借字、国語晋語「獻公田見翟祖之氣」、韋注云「翟祖、国名」、是也、不著何亦北胡国、周書王会篇云「不屠何青熊」、孔晁注云「不屠何、亦東北夷也」、管子小匡篇「敗胡貊、破屠何」、尹注云「屠何、東胡之先也」、劉恕通鑑外紀「周恵王三十三年、斉桓公救燕破屠何」、「屠」、「著」声類同、不著何、即不屠何也、又王会伊尹献令「正北有且略豹胡」、且略、即此且、及左伝「翟祖」、「豹胡」、亦即不屠何、「豹」「不」、「胡」「何」、並一声之転、不屠何、漢為徒何縣、属遼西郡、故城在今奉天錦州府錦縣西北、祖、拠国語為晋獻公所滅、所在無考、**其所以亡於燕・代・胡貊之間者**、貊、貉之俗、詳兼愛中篇」。

⑯　秦・趙・燕の辺郡について、『漢書』地理志に見える古国・異族に由来する縣名には次のものがある。［隴西郡］狄道・上邽・氐道・大夏・羌道・［安定郡］烏氏・月（支）〔氏〕道・［北地郡］朐衍・義渠道・［上郡］龜茲・［朔方郡］渠搜・［鴈門郡］楼煩・［代郡］代・［右北平郡］無終。

⑰　白鳥庫吉一九一〇～一三。

⑱　郭治中一九九七。

⑲　『史記』恵景間侯者年表「亜谷　以匈奴東胡王降、故燕王盧綰子侯、千五百戸」は盧綰の「子」とするが、「子」はおそらく「孫」字の破損したものであろう。

⑳　『後漢書』南匈奴列伝「（元和）二年（後八五）正月、北匈奴大人車利・涿兵等亡来入塞、凡七十三輩。時北虜衰耗、党衆離畔、南部攻其前、丁零寇其後、鮮卑擊其左、西域侵其右、不復自立、乃遠引而去」。この時点までに丁零は独立を回復している。

㉑　『蒙古遊牧記』巻一／科爾沁部／右翼中旗「旗西三十里有鮮卑山、土人名蒙格」・巻三／阿嚕科爾沁部「旗西北…百四十里有烏遼山、即烏丸山」。

結　語

若干の所見を補足しつつ、東胡の推移について整理しておこう。中国北疆に対する遊牧民の南下は、前五、四世紀の交にようやく確認される。これら遊牧民およびその後裔である匈奴・鮮卑などは、前四世紀以前から中国北疆にあった諸文化の担い手とは形質人類学的に相違するのであり、夏家店上層文化や十二台営子文

化を東胡に比定する説は成立しがたい。

遊牧民の南下に対し、秦・趙・燕は北疆に長城を構築し、辺郡を設置した。前三世紀の趙に侵攻した勢力には「胡貉」「屠何」があり、それぞれ前漢の匈奴・東胡に相当するものと思われる。ザバイカル東部からモンゴル東部・南部さらに呼倫貝爾高原には匈奴文化に先行する板石墓文化があり、その担い手が東胡であろう。

燕もまた長城を構築しているので、遊牧民の南下を被ったものと思われるが、同時代的な記録は残されておらず、この遊牧民が戦国期に何と呼ばれたかは不明である。趙北の「屠何」が燕北にも侵攻した可能性は大きいが、前漢初年の記述ではこの遊牧民は、「胡」と称されており、当時の匈奴侵攻を反映して、むしろ匈奴と認識されていた模様である。

前三世紀末の匈奴冒頓単于の攻撃で東胡は解体した。戦国後期に趙北にあった「屠何」が漢代の文献では燕北にあるものとされるように、東胡がより西方の勢力圏を喪失し、その一部が燕北に東遷したことは事実であろう。燕北に東遷した東胡遺民、おそらくのちの烏桓は、前二世紀前半には、匈奴の「東胡王」の支配下にあった。この「東胡王」の存在を根拠として、戦国以前の燕北に東胡があったとする認識が成立した。

以上、東胡に関わる文献的記述を精査した上で、考古学的資料との整合を試みたが、双方の材料から獲得される情報はなお絶対的に不足しており、本稿の所見もなお不確定な部分を多く含むものといわざるを得ない。こうした資料的限界を率直に認知した上で、文献史学・考古学は安易な附会に陥ることなく、まずは純粋にそれぞれの方法に基づくより確実な知見の蓄積につとめることが肝要であろう。

引用文献

【日　文】

秋山進午一九六八～六九「中国東北地方の初期金属文化の様相――考古資料、とくに青銅短剣を中心として――」、『東北アジア民族文化研究』、同朋舎、二〇〇〇、一六一～二三三頁。

臼杵勲二〇〇四『鉄器時代の東北アジア』、同成社。

内田吟風一九四三「烏桓鮮卑の源流と初期社会構成――古代北アジア遊牧民族の生活――」、『北アジア史研究　鮮卑柔然突厥篇』、同朋舎、一九七五、一～九三頁。

小川琢治一九二九「北支那の先秦蛮族」、『支那歴史地理研究続集』、弘文堂書房、二五～一六三頁。

加藤謙一一九九八『匈奴「帝国」』、第一書房。

白鳥庫吉一九一〇～一三「東胡民族考」、『塞外民族史研究』上、岩波書店、一九八六、六三～三三〇頁。

高浜秀一九九九「大興安嶺からアルタイまで――中央ユーラシアの騎馬遊牧文化――」、藤川繁彦編『中央ユーラシアの考古学』、同成社、五三～一三六頁。

東亜考古学会編一九三八『赤峰紅山後――満州国熱河省赤峰紅山後先史遺跡』、東亜考古学会。
町田章二〇〇六『中国古代の銅剣』、奈良文化財研究所。
宮本一夫二〇〇〇『中国古代北疆史の考古学的研究』、中国書店。
吉本道雅一九九八「史記戦国紀年考」、『立命館文学』五五六：一～七六。
――二〇〇二a「墨子小考」、『立命館文学』五七七：一～三三頁。
――二〇〇二b（金啓孮訳）「匈奴初見考」『愛新覚羅氏三代阿爾泰学論集』、明善堂、一九七～二一四頁。
――二〇〇六「史記匈奴列伝疏証――上古から冒頓単于まで――」『京都大学文学部研究紀要』四五：三三～八三。
――二〇〇七「山海経研究序説」、『京都大学文学部研究紀要』四六：二七～六八。
――二〇〇八「貊」、『京都大学文学部研究紀要』四七、（未刊）。

【中　文】

翟德芳一九九四「試論夏家店上層文化的青銅器」、『内蒙古文物考古文集』、中国大百科出版社、二九六～三一六頁。
馮恩学二〇〇二『俄国東西伯利亜与遼東考古』、吉林大学出版社。
郭治中一九九七「内蒙古東部地区新石器―青銅時代的考古発現与研究」、『内蒙古文物考古文集』第二輯、中国大百科全書出版社、一三～二三頁。
吉林大学辺疆考古研究中心・内蒙古文物考古研究所二〇〇四「二〇〇二年内蒙古林西縣井　溝子遺址西区墓葬発掘紀要」、『考古与文物』二〇〇四：一：六～一九。
靳楓毅一九八七「夏家店上層文化及其族属問題」、『考古学報』一九八七：二：一七七～二〇八。
李逸友一九五九「内蒙古昭烏達盟出土的銅器調査」、『考古』一九五九：六：二七六～二七七頁。
――一九六四「寧城南山根出土銅器」、内蒙古文物工作隊編『内蒙古文物資料選輯』、内蒙古人民出版社、五五～五七頁。
林幹一九八九『東胡史』、内蒙古人民出版社。
林幹・再思一九九五『東胡烏桓鮮卑研究与附論』、内蒙古大学出版社。
林澐一九九二a「関于中国的匈奴族源的考古学研究」、林澐一九九八：三六八～三八六。
――一九九二b「東胡与山戎的考古探索」、林澐一九九八：三八五～三九六。
――一九九八『林澐学術文集』、中国大百科全書出版社。
――二〇〇三「中国北方長城地帯游牧文化帯的形成過程」、『燕京学報』一四：九五～一四五。
劉観民・徐光冀一九八一「内蒙古東部地区青銅器時代的両種文化」、『内蒙古文物考古』創刊号：五～一四。
劉国祥二〇〇〇「夏家店上層文化青銅器研究」、『考古学報』二〇〇〇：四：四五一～五〇〇。
馬長寿一九六二『烏桓与鮮卑』、広西師範大学出版社、二〇〇六。
馬利清二〇〇五『原匈奴、匈奴――歴史与文化的考古学探索――』、内蒙古大学出版社。
米文平一九九七『鮮卑石室尋訪記』、山東画報出版社。
喬梁・楊晶二〇〇三「早期拓跋鮮卑遺存試探」、『内蒙古文物考古』二〇〇三：二：五一～五八。
孫進己・孫海二〇〇三「鮮卑考古学文化」、『内蒙古文物考古』二〇〇三：二：五九～七〇。
孫危二〇〇七『鮮卑考古学文化研究』、科学出版社。
魏堅編二〇〇〇四『内蒙古地区鮮卑墓葬的発現与研究』、科学出版社。王輝二〇〇〇『秦出土文獣編年』、新文豊出版公司。
烏恩岳斯図二〇〇三「関于早期游牧人文化研究中的幾個問題」、『内蒙古

文物考古』二〇〇三：二：三七～五〇。
——二〇〇七『北方草原考古学文化研究——青銅時代至早期鉄器時代——』、科学出版社。
楊寛一九九七「戦国郡表」、『戦国史一九九七増訂版』、台湾商務印書館、六七五～六八五頁。
中国社会科学院考古研究所編二〇〇四『中国考古学両周卷』、中国社会科学出版社。
朱貴一九六〇「遼寧朝陽十二台営子青銅短剣墓」、『考古学報』一九六〇：一：六三～七二。
朱泓二〇〇六「東胡人種考」、『文物』二〇〇六：八：七五～七七、八四。
朱永剛一九八七「夏家店上層文化的初歩研究」、『考古学文化論集』一、文物出版社、九九～一二八頁。
——一九九七「大、小凌河流域含曲刃短剣遺存的考古学文化及相関問題」、『内蒙古文物考古文集』第二輯、中国大百科全書出版社、三六二～三七四頁。

【露　　文】

Цыбиктаров А. 1998 *Культура плиточных могил Монголии и Забайкалья*Ф Улан-УдэЦБур. Гос. ун-т.

▲ 夏家店上層文化
× 十二台営子文化
（烏恩岳斯図2007:174-180,
224-226に言及された縣）
板石墓文化の東限・南限
（Цыбиктаров 1998:194
参照）
札賚諾爾
呼倫湖
科爾沁右翼中旗
阿嚕科爾沁旗（清代）
西拉木倫河
達来諾爾
老哈河
遼西郡
遼東郡
大凌河
徒河縣（漢代）
鴈門郡
代郡
趙
上谷郡
漁陽郡
燕
右北平郡

関係地図

partisan de la patrie.

The Establishment of Japanese Opium Regime in Guandong Leased Territory (関東州) and the Chinese Merchants: A Study on Japanese Rule of the Region

by

KATSURAGAWA Mitsumasa

We can see three inexplicable features in the Japanese opium regime in the Guandong Leased Territory at the beginning of its establishment. Considerations of them, while paying attention to their relations with the activities of local Chinese opium merchants, made it evident that the employment of the opium farm system by the Japanese Guandong Government aimed at making Guandong an exclusive market for Taiwanese prepared opium, but the aim was not successful. It has also become understandable that the Japanese planned to separate Guandong from the economic, human and social networks which had been set up around the region to connect it to all the other regions of the Chinese mainland. The final goal was to connect it to Taiwan in order to build up a new network ranging from Tokyo, the apex, to Guandong and Taiwan. It could be said that the plan would probably be the basic measure at that moment in order to rule Guandong, or one of the temporary basic strategies to form the Japanese empire. The later adjustment of the opium regime in Guandong was for the purpose of founding a main pillar to advance or stabilise the rule of the region. It can be concluded that historical research of the opium problems is significant as a part of the historical research of the Japanese empire.

On the Donghu

by

YOSHIMOTO Michimasa

It goes without saying that the opposition of agriculturalists in China proper to the nomads of Mongolia was one of the dynamics in the history of eastern Eura-

sia. As shown by the fact that the "Xiongnu Liezhuan" chapter of the *Shiji* the first detailed written description of nomads, the Xiongnu were the earliest nomads to maintain continual contact with China. Before the establishment of their own empire, the Xiongnu are said to have been situated between the Donghu on the east and Rouzhi on the west, so it can be surmised that the Donghu had probably established the first nomad empire in the eastern Eurasia prior to that of the Xiongnu. But in spite of such historical importance, only fragmentary accounts have been handed down about the Donghu because their empire was destroyed by an Xiongnu attack at the end of the 3rd century B.C. and they had no opportunity for continuous interchange with China.

The "Xiongnu Liezhuan" first mentions, "the Donghu and Shanrong were to the north of the Yan state" in the descriptions of the Spring and Autumn period. It then recounts the Yan general Qin Kai's repelling of the Donghu in the descriptions of construction of the great walls by the Qin, Zhao, and Yan states during the Late Warring States period. Then, in describing the First Emperor's achievement, it recounts, "the Donghu were strong and the Rouzhi prosperous." Finally, the destruction of the Donghu is found in the description of Maodun Shanyu's establishment of his empire. This series of descriptions is the only source that deals with the Donghu diachronically. In addition to these, descriptions of the Wuhuan and Xianbei as tribes that were descendants of the Donghu are seen in the "Wuhuan Xianbei Liezhuan" of the *Houhanshu* and elsewhere.

Recently, as a result of the increase in archaeological materials, systematic studies of Xianbei's tombs have been published, and furthermore, there has been an attempt to see the Donghu as the source of Xianbei culture based on a survey of the archaeological evidence. Generally speaking, descriptions in the "Xiongnu Liezhuan" have been quoted uncritically in these studies. However, descriptions in the *Shiji* are problematic and can never be accepted uncritically. This paper adopts such a point of view in attempting to comprehensively criticize the historical descriptions of the Donghu, and thereby coordinates reliable historical information, which has been filtered though this process, with archaeological studies to ascertain those matters that can be known about the Donghu at present.